

2022 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

## 人を殺してはならない

（原文は英語）

ソフィア（20 歳）

ロシア

私にとって、それはずっと疑うことのない明白なことだった。証明を必要としない自明の理。火は熱く、氷は冷たく、全ての命は大切である。人に説明する必要のないことだ。

しかし、3カ月ほど前にそれは変わってしまった。私の住む国が「戦争」を始めたのだ。

戦争。それはどこからともなく現れ、私たちの頭を直撃する。亡くなっていく人々や、家族や家を失った人々に対する痛み、戦争を止められないことに対する絶望、どのような終局を迎えるのかという恐怖が、全て一度に自分の中に広がっていき、どこかに隠れ、全てを忘れ、これは嘘だと信じなくなる。でも、これは現実である。自分が生きている世界は一変したのだ。

これまでずっと信じ、大切にしてきた自分の価値観、自分の人生の原理原則の基礎を成していた価値観が、この「戦争」という残虐で破壊的な炎によって全て灰にされてしまったように感じる。

平和。

私は子どもの頃から平和に暮らすことの大切さを教わってきた。誰もみな、第二次世界大戦で支払った高い代償を覚えている。あれほどの残酷さと暴力があったにもかかわらず、私たちの先祖の献身と勇気によって、私たちは平和な未来を生きる機会を与えられた。

しかし、現在起きている悲劇は「戦勝記念日」に新しい意味を与えている。まさにこの日と時を同じくして、隣国の人々は自分たちの頭上に青空を取り戻すために戦い、亡くなっていることを思うと、私にはこの日を祝うことは不可能に思える。都市の爆撃を命令した人間が、記念碑に花を手向けることで戦死した英雄たちを追悼するこの良き日は、偽善と嘘にまみれている。私の頭の中では、祝祭の花火と集中砲火の轟音は共存できない。

言論の自由。

これ以上ひどいことなんてあり得るだろうか。それがあつたのだ。それは、今起きていることについて公然と話すことができないことだ。自分の意見を誰かと共有しようとすると、言論の自由が錯覚であることがたやすく明らかになる。たった一つの「間違つた」言葉——「戦争」——が爆発を引き起こす火花になりかねないのだ。私たちは「それ」をそう呼ぶことも、「それ」に反対の声を上げることも、平和を望むことも許されていない。

罰せられることなく、自分の意見を共有できる世界に生きることに私は慣れてきた。さまざまな観点から物事が報じられるのを聞いていたことを覚えている。しかし、それももう終わりだ。政府に賛

同しない人間はみな「外国のスパイ」と呼ばれる。これは絞殺に等しい。私は実際に自分の首が縄で強く締めつけられているように感じ、今にも息が詰まりそうだ。

人間の命。

なぜ人は、罪もない人々を殺す口実を探しているのか。なぜ彼らは他人の生活を壊す権利があると思っているのか。虐殺は悲劇かつ陰惨であり、絶対に正当化されてはならない。

当然のことなのに、私はそのことを証明しなくてはならない。

「あなた、本当に分からないの。人が死んでいるのよ!」。私は涙が顔を流れ落ちるのをこらえながら声を限りに叫んでいる。

「それは彼らの自業自得だよ」

「あなた、テレビを見てないの?」

「政治はそんなに単純なものじゃないんだよ」

一つ一つの言葉が弾丸よりもひどい打撃を私に与え、私の傷ついた心に次々とぼっかり穴を開けていく。彼らの目に浮かぶ自信や冷たい無関心は、私の魂と心に恐ろしさのあまり涙を流させる。世界は狂ってしまったのか。私が何か見逃しているのだろうか。

違う。私は何も見逃していない。それは確かだ。そして、私の馴染みのある世界が崩壊し始めている今、私の持つ信念が私を踏みとどまらせ、状況を理解するのに役立っている。

私のことを世間知らずだという人もいるだろう。でも、私は善は悪に勝つと信じている。それに、私は独りではないことを知っている。力を合わせれば状況を変えられると信じている。平和、言論の自由、人の命。これらのために私は立ち上がる。これらが「私の価値観」だ。

そして、私は正しい。なぜなら、それはとても単純なことだからだ。

人を殺してはならないのだ。